

# 平安初期の種性論諍

惠 谷 隆 戒

平安初期の種性論諍は、印度・中國・日本の三國論諍中、最も峻烈を極めたものであつた。何故かくの如き猛烈な論戦が展開されなければならなかつたのであろうか。その理由を究明せんとするのが本稿の課題である。この論諍は、大小戒律論諍・三一權實論諍と關連している爲に、その内容はすこぶる複雑であるが、問題の中心は、三乘家の人性差別論と一乘家の人性平等論との對決であつた。即ち法相宗對天台・三論・華嚴・眞言等の諸宗の宗論がそれである。

中でも法相の徳一對天台の最澄の論諍が最も激烈である。最澄が弘仁七年に依憑天台集を著したのが動機となつて、法相の徳一が佛性抄を著してこれを攻撃するや、最澄は照權實鏡・守護國界章・決權實論・一乘義集・法華秀句等を著して、徳一を難破したに對し、徳一は中邊義鏡・慧日羽足・遮異見章を著して最澄を破したのであつて、最澄は徳一を指して饜食者・北嶮と呼び、徳一は最澄を指して邊主と呼んで、兩者互に痛烈な論戦を交している。これに次ぐものが、法相對三論のそれであつて、最もおだやかに論じているのが、法相對華嚴・眞言である。これらの論諍は、中國佛教の影響によること勿論であるが、日本佛教の社會的環境がかくなさしめたとも見ることが出来るであらう。中國佛教の影響と云うのは、唐の玄奘門下の種性論諍であつて、南北朝以來の舊譯佛教が、悉有佛性

を定説としていたに對して、玄奘の新譯佛教が、瑜伽師地論に立脚して、行佛性の立場より五性各別説を立てて、理佛性を遮したことは、眞諦以來理佛性に立脚して人性平等を主張していた舊譯佛教の傳灯に一大衝動を與えた。そこで靈潤は十四門義を著して玄奘の新譯佛教を難破したのである。これに對して玄奘門下の神昉が種性差別集を著し、神泰が一卷章を著して靈潤の難を返破するや、新羅の義榮が一卷章を著して靈潤の義を救い、玄奘門下の法寶が一乘佛性究竟論を著して、神昉・神泰の義を難じ、慈恩の門人慧沼が能顯中邊慧日論を著して、法寶の義を難破したのがそれであつて、これらの論諍書は、悉く我が國の入唐留學僧によつて將來されてあつたものと思われるので、平安初期の論諍書には、これらの諸書が引用されてあることより見ても、玄奘門下の種性論諍が、平安初期のそれに影響していることが證明される。然るに、この時の論諍書中現存しているものは、僅かに慧沼の能顯中邊慧日論四卷と法寶の一乘佛性究竟論六卷中の第三卷のみであつた。従つて論諍の思想内容を知悉することが出来なかつたのであるが、筆者が昭和八年に金澤文庫で法寶の一乘佛性權實論三卷を發見し、昭和十一年石山寺の唐筆寫經中に、一乘佛性究竟論の第一・二・四・五の各卷が存することを知り、その内容を檢討することによりて、玄奘門下並に平安初期の

種性論評の盲點を解明することが出来た。即ち平安初期のそれは、三乗家が慧沼の能顯中邊慧日論の説に立脚して居るのに對して、一乗家は多く法寶の一乘佛性究竟論の説を基盤として居ることがわかつて來た。法寶の一乘佛性究竟論を、日本で最初に研究したのは、奈良朝時代に出世した、南都大安寺の慶俊である。彼は道慈の門人で、三論の學者であり、一乘佛性究竟論記六卷を著している。すでにこの頃から佛性の問題がとりあげられて論究されていたのであつて、漸安が弘仁六年十月の維摩會の時に、師匠の説として記録した法相灯明記の中に、

從廣庭天皇十三年壬申至弘仁六年乙未歲合二百六十八歲。

其中間。元興與福二寺先德評法相義已逕年數二千今未息。

今勅三八條流行於後生。示其兩途。

と云つて、内明の十義・因明の六義について、兩派の相違點を記している。この問題は直接種性論評を述べたものではないが、當時元興寺と興福寺との間に論評が交えられていたことがわかる。又成唯識論本文抄卷二には、闍提成佛不成佛の論評のあつたことを記し、北寺の行賀・南寺の孝仁、平備はともに成佛説を立てたと記している。これらの人々は、奈良朝より平安初期に活躍した人物で、當時興福寺・元興寺・大安寺等に居住していた學問僧の間に、種性論評がなされていたことが知られる。平安朝になつて、最澄・空海によつて、新しく天台・眞言の兩宗が開創され、しかもこの兩宗は共に一乘佛教であつたと云うことは、三乗家の法相宗に對して、新しい恐れが加えられたわけである。しかし、空海は南都と特殊關係をもつていた爲に、直接には法相宗を攻撃して居らないが、南都に反旗を翻えして革新佛教を提唱した天台の最澄は、南都を攻撃する

ことが最も峻烈であつた。ことに最澄と徳一の論評は、弘仁七年より弘仁十一年まで激論を展開し、最澄が入寂した前年に法華秀句を著して、徳一にとどめをさすことによつて一段落を告げたのである。最澄對徳一の種性論評の内容は、徳一の著作が現存していない爲に明瞭を缺くが、幸に最澄の著作の中に引用されているから、それによつてほぼ彼の思想を知ることが出来る。徳一の思想が最も多く引用されて居るのは、最澄の守護國界章である。これによつて見ると、徳一は慈恩並にその門人慧沼の學説に立脚して、最澄の學説が唐の法寶の一乘佛性究竟論に依つて居ることを難破している。

又最澄も徳一の學説が慧沼の能顯中邊慧日論に依つて立論していることを指摘している。この點から見れば、最澄と徳一との種性論評は、法寶の一乘佛性究竟論と、慧沼の能顯中邊慧日論の中に記されている問題が、論評の中心問題であつたことがわかる。兩者の論評の要旨は、一切有情悉有佛性・定性二乘廻心・報佛智常・眞如所緣々種子・有漏生無漏・定教前後・教權實・五種性差別・畢竟無性有情・無種性有情相・別教一乘・法華權實等の諸問題がその中心となつて居るもので、法寶對慧沼の論評が日本に於て再び燃えあがつた感がある。最澄の最後の著作である法華秀句は、上卷に於て悉有佛性を強調し、中卷に於て印度・中國・日本の佛性論評史を詳述しているのであるが、惜しいことには、中卷の終りと下卷の初めの所が缺本となつて居る爲に、日本の佛性論評史の内容を知ることが出来ない。最澄の思想の要諦は、法華經の皆成佛道、卽身成佛の思想を強調するにあり、従つて闍提成佛、定性二乘の廻心を力説して、五性各別説を破するにある。これに對して、徳一は、瑜伽論に立脚して五性各別を強調し、定性二乘の廻心を認めない點にある。この最

澄對德一の論諍は、三國の種性論諍史上最も峻烈をきわめたものであつた。これに續いて淳和天皇の天長年間に勅命によつて各宗の宗書を製作せしめられた。即ち法相宗護命の大乘法相研神章五卷、律宗豐安の戒律傳來記三卷、華嚴宗普機の華嚴宗一乘開心論六卷、三論宗玄叡の大乘三論大義鈔四卷、天台宗義眞の天台法華宗義集一卷、眞言宗空海の秘密曼荼羅十住心論十卷がこれである。これらの

諸著は、何れも破邪顯正に重點を置いて記述している。この中、豐安と普機の著作は殘缺本である爲、その内容を知悉することが出来ないが、その他のものは何れも種性問題を論じている。中でも玄叡の大乘三論大義鈔が最も詳論し、これに次いで護命の大乘法相研神章、義眞の天台法華宗義集である。玄叡のこの問題に關する學説は、大乘三論大義鈔の卷二と卷三とに詳論してある。即ち彼の説は、涅槃經や中論に立脚して五種佛性義を立て、八不を絶した絶對性の立場に立つて悉有佛性を強調し、空有諍論一、常無常諍論二、五性爾不爾諍論三、有性無性諍論四、定性不定性諍論五、變易生死諍論六、三一權實諍論七、三車四車諍論八、教時諍論九、說不說諍論十の十論諍について記述し、種性問題についての三論の立場を明かにしている。玄叡の論述している問題は、何れも唐の法實と慧沼の論諍の中心問題ばかりであつて、彼の先輩である大安寺の慶俊が、法實の著作を註解して一乘佛性究竟論記六卷を著しているのであるから、その後輩である彼が法實の學説によつてゐることは理の當然と云わねばならぬ。次に法相宗の護命は、その著大乘法相研神章に、十四門義を立て、法相宗の立場から、華嚴・律・三論・天台、成實・俱舍の教義を批判し、特に華嚴と天台の學説を痛評している。次に義眞は、その著天台法華宗義集に、九義を立てて一乘眞

實三乘方便、悉有佛性・悉皆成佛を力説している。その中特に一乘義に於て、攝大乘論は定性の二乘の廻心を認めているのに、法相宗がこれを諍うことは凡そ意義のないことであると批評している。六本宗書の作製につゞいて、元興寺の宗法師が、一乘佛性慧日抄一卷を著し、法實の一乘佛性究竟論に立脚して、三論宗の立場から法相宗の五性各別説を難破している。

前述の如く、平安初期に於ける種性問題を中心とする論諍は、まことに峻烈であつたが、何故三論・天台・華嚴等の一乘家が、法相の三乘家を難破したのであろうか。この疑問を説明することが、日本佛教思想史上重要な課題となつてくる。それを唐佛教の摸倣として簡單にかたづけられるわけにはゆかない。この時代に特にこの問題が論究される所以は、そこに何等かの原因があつた筈である。吾人は今これを、藤原貴族を背景とする興福寺の貴族佛教が、人性差別觀に立脚して貴族の優越性を強調せんとするに對し、貴族の背景を持たざる元興・大安・延曆の諸寺が、人性平等觀に立脚して反貴族的佛教を鼓吹せんとする一種の思想運動の展開であると見たいのである。當時名聞利養を望む者が、競うて興福寺へ轉籍してゐることは、最澄の年分得度學生名帳や、續日本紀・日本後紀の記事から見ても明かである。當時各宗に對して優位を占め、權勢をほしいままにしていた法相宗に對し、その思想の根底からこれをくつがえさんとしたのが三論・天台であり、それが種性問題の論諍となつて展開したのではなからうか。